

## 明治末年の「ロシヤパン」の呼び売り

倉田 有佳

「明治42年 ロシヤパン（大型黒パン）の呼び売りが東京市中の評判となる」（『パンの明治100年史』）。どんな人が黒パンを買ったのか気になるところだが、樺太庁通訳官秋本（秋元とも）義親が明治42（1909）年11月から実施した結果をまとめた「残留露国人調査」によると、ニコライ・ゼレーフ（43才）は仲間と3人で東京に行き、製パンと行商に従事し、その後神戸でロシア式のパン焼窯を造り、「露式」パンの行商を9カ月余り行った。東京では、一日に1,500個を売り尽すこともあるほど商売はうまくいっていた。しかし、雇主の日本人が契約を履行することは稀で、約束した報酬も与えないため、債権を放棄して再び島（南樺太）に戻って来ていた。

現代の外国人労働者への不当な扱いを思わせるような話だが、ゼレーフによれば、東京でパン行商を行う残留ロシア人は他にもいたが、在京ロシア大使館は無関心で、擁護してくれることはなかったというため、泣き寝入りするしかなかったのだろう。

明治41（1908）年、東京のパン屋は364ヶ所あり、うち46軒が食パン業、残りは菓子パン屋だった（『パンの明治100年史』）。「パン」人気にあやかり、一儲けしようと考えた日本人がいたとしても不思議ではない。現に、露国式パン製造と販売（行商）人を求め、東京から北海道に向かった高橋安太郎なども、本業は「鞆商」、資金提供者は別にいた。高橋が札幌のパン屋で雇われていた二人のロシア人と雇用契約し、連れて帰京したのが明治41年3月28日のことだった。

ところが、その1年後、売り上げの良い売り子への嫉妬から、もう一人の売り子が殺人を起こす。事業主は、一度に二人の雇人を失う痛手も大きかっただろうが、二人が「樺太の

流刑囚徒」、しかも殺人犯だったことを知り驚愕した。札幌で見つけてきたため、素性を知らずに雇ったのだろう。そして事件は複数の新聞が詳しく取り上げたため（明治42年4月14日『東京朝日新聞』ほか）、「ロシヤパン」そのものの評判を落とすことにもなったはずだ。

もともと、「パンも近頃は余り儲からぬ相なり」、と明治42年8月24日『東京朝日新聞』が報じるように、箱車でのパンの呼び売り自体の人気にも陰りが出ていた。「ロシヤパン」として、ロシア人や従軍看護婦スタイルの呼び売りで人目を惹いたのだろうが、その人気は一過性のものであった可能性が高い。食用パンが庶民に浸透するのは、もう少し先のことだ。（ロシア極東連邦総合大学函館校准教授）



日露戦争後のことでもあり、従軍看護婦スタイルもあり、下は足袋に草履で、えびすか大黒の顔を付けた箱車を引きながら、「パン、パン、ロシヤパン」という呼び声で売り歩いた（昭和52年2月6日『読売新聞』）

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております